

## 対馬の旅●内田さやか

島に着くと外務省よりメールあり対馬は外国なんかじゃないがセザンヌの緑に出会うまのあたり対馬の山の木々のきらめき

保護されしつシマヤマネコたじろがず真っ直ぐわれに眼向けくる

『韃靼の馬』に書かれし対馬藩 誠意外交為しし土地なり

「日本人でよかつた」の貼り紙があるやしろの前を通り過ぎたり

新緑のあふるる島の山あいの廃校にたつ白鷺のむれ

居酒屋は地元の人のたまり場で対馬自慢の話に加わる

焼酎をおごりてくれしは教師にて単身赴任四年目という

「へたくそで置いてけぼり」と島民は対馬のことを笑いつつ呑む

山に行く朝おおきな塩むすび持たせてくれたり宿の女将は

対馬藩から長崎県へと移りしを巨木はしかと見続けており

三百の島を歩きし宮本常一まず記ししは対馬の人々

この先は行つてはならぬと人の言う島の聖域オソロシドコロ

往きの便に会いし夫婦と二日後に会いて巨木の話が弾む

旅の余韻の中で転勤告げられぬ長崎暮らしそのものが旅